他はない。其特異點は、文獻で知れるので、諸君も亦已に思ひ當たられる事と思ふ。今、迦毗羅衞と降誕とについては、後に述べるとして、こゝでは暫く措くが、佛陀伽耶では、些の疑もなく名高い菩提樹であつたのであり、今日も變りはない。婆羅奈斯附近の鹿野苑では、初轉法輪を示すのであるが、之は二匹の鹿に緣のあるものもあり、ないものもあるけれども、一の輪で、具體的な言葉に當然翻せざるを得なかつたのである。終りに拘尸那竭羅巡拜が何れも先づその目的とする所は、勿論塔であり、之は般涅槃の場所に全く適はしい標(シルシ)になつてゐる。要するに、樹と輪と塔と、之で巡禮の四大靈場の三所を偲ぶに十分であり、同時に、四大奇蹟の舞臺であつた三所を思ひ浮べるに足る。之等三箇の標徵が、恰も佛教美術の根本的な三題材である事は之を見れば確められる所であつて、決して單に偶然得た結果ではないのである。

繰返して言へば、上述の點は凡て、何等臆說を以てした所はなく、現存の遺物を時代を逐うて見れば、こゝまで進めて來たあらゆる點を證據立てる事になる。實際に於ては、西曆紀元前五世紀に於ける印度の記念品について、